

---

## 私たちも被災者なのに

(由井りょう子ほか・著、石巻赤十字病院の100日間、東京、小学館、2011、p.195-204)  
2013年9月27日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

日赤の救護班の中でも心のケアをするチームが、石巻赤十字病院を訪れた際、まず初めに感じたのは、病院のスタッフが非常に精神的に追い詰められているということだった。

心のケアをするチームはこの状況を改善するために、避難所を回るだけではなく、スタッフへの支援も重要視し、マッサージやカウンセリングなどを行った。石巻赤十字病院には精神科はなかったが、多くの精神科医や心療内科医、臨床心理士のすばやい対応、アドバイスで、少しずつ日常を取り戻していた。

災害が起きたときに、自分たちも被災者になろうとは、誰もが想像もしていなかった。

スタッフたちは、携帯電話もメールも通じなくなり、家族の安否も確認できないような状況で働かざるを得ないという事態に陥っていた。夜になって、運ばれてきた患者を診たとき大変なことが起こったという恐怖と不安におののき、トリアージタグに名前や住所を書くとき、手が震えてとまらなくなったという人もいた。それでも仕事を投げ出すわけにはいかないという義務感から無理に働き続けていた。

幼い子供の安否がわからないまま仕事をしていた人は、自分の子供と同じ年頃の子供が運ばれてくる度に、背筋が凍りつくような恐怖を感じながら仕事を続け、自分でも精神状態がめっちゃめっちゃになっているのを自覚しながらも働いていた。

「いま、できるのは働くことしかない。働いていれば、よけいなことを考えないですむから」といった風に、悲壮な覚悟をもって働いていた人もいた。

遺体安置所では、警察の手によって、どの遺体もきれいに整えられ、胸元で両手を組み合わせられていた。子供の遺体には布がかけてあった。何百体の遺体が整然と並べられている遺体安置所は、現実感を失ってしまうような光景だった。周囲では、多くの家族が、そうした遺体に対面し、あきらめたり、泣き崩れたりしていた。

2親等以内の家族を亡くした、あるいは行方不明というもの41人、家屋の全壊118人、大規模半壊93人、半壊17人、一部損壊106人、7月8日の時点で職員の間にはこれだけの甚大な被害が出ていた。

仕事中は気丈に振舞っていても、休憩時に泣いている職員も少なくなかったので、被災した職員を休ませるべきか、仕事を続けさせるべきかという葛藤は本部でもあった。その際の対応は、「強制はしないが、休みを取りたい人は十分に取っていい」ということであった。

こうした状況においては、被災者の心身のケアはもちろん必要であるが、それをサポートするスタッフに対するケアも十分に出来るような体制を整えておくことが、病院の機能を維持するためにも必要であると考えられる。